

# 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する「りんだうの花」と悲しい思い

石井竹夫

帝京平成大学薬学部  
e-mail: t.ishii@thu.ac.jp

## Gentian Flowers and Sad Memories Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

**Keywords:** 文学と植物のかかわり, 源氏物語, 野菊の墓, 竜胆, 芝草, すゝき

『銀河鉄道の夜』は読書だけではなく、劇場用アニメ映画（杉井ギサブロー監督・ますむらひろし原案, 1985）、劇場用実写映画（秋原正俊監督, 2006）、ミュージカル（劇団ひまわり, 2008；劇団わらび座, 2004～2007；宝塚歌劇団星組, 2001）、演劇（東京演劇アンサンブル, 2001）、プラネタリウム（KAGAYA studio, 2006）でも我々を楽しませてくれている。中でも、プラネタリウム版は従来の光学的投影装置ではなく、デジタルの全天周映像システムが採用され視覚的に見た美しさで群を抜いている。このプラネタリウム版でははっきりと識別できる植物がリンドウである。鉄道線路の緑の芝生に自ら発光して輝くススキ原を背景に、数十本あるいは数百本の鮮やかな紫色の花のリンドウが全天周のスクリーン一杯に広がる。まさに、ファンタジーな世界を創出させている。『銀河鉄道の夜』の本文では、第六章の「銀河ステーション」の末尾で出てくる。ジョバンニとカムパネルラが天上の銀河鉄道を走る列車の車窓から外の景色を見ているときに最初に眼に飛び込んでくるのがリンドウである。

ごとごとごとと、その小さなきれいな汽車は、そのすゝきの風にひるがへる中を、天の川の水や、三角標の青白い微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「あゝ、りんだうの花が咲いてゐる。もうすっかり秋だね。」カムパネルラが、窓の外を指さして云ひました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたやうな、すばらしい紫のりんだうの花が咲いてゐました。

「ほく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジョバンニは胸を躍(をど)

らせて云ひました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、さう云ってしまふかしまはないうち、次のりんだうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思ったら、もう次から次から、たくさんのいろいろな底をもったりんだうの花のコップが、湧(わ)くやうに、雨のやうに、眼の前を通り、三角標の列は、けむるやうに燃えるやうに、いよいよ光って立ったのです。(下線は著者)

プラネタリウム版の『銀河鉄道の夜』は、この「月長石でも刻まれたやうな、すばらしい紫のりんだうの花」や「次から次から、たくさんのいろいろな底をもったりんだうの花のコップが、湧(わ)くやうに、雨のやうに、眼の前を通り、三角標の列は、けむるやうに燃えるやうに、いよいよ光って立ったのです。」という描写を見事に映像化して見せた。しかし、賢治はたくさんのリンドウの花をファンタジーな世界にするためだけに使っていない。なぜなら、美しい風景描写の直ぐあとにカムパネルラの悲しい内面描写の表出があるからである。第七章「北十字とプリオシン海岸」の冒頭は次のように始まる。

七、北十字とプリオシン海岸

「おっかさんは、ほくをゆるして下さるだらうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったといふように、少しどもりながら、急(せ)きこんで云ひました。

ジョバンニは、

(あゝ、さうだ、ほくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのやうに見える橙(だいだい)いろ

の三角標のあたりにいらっしゃって、いまぼくのことを考へてゐるんだつた。)と思ひながら、ぼんやりしてだまってゐました。

「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸(さいはひ)になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらへてゐるやうでした。(下線は著者)

この場面は、「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」と表白するように親孝行も満足に出来ずに死んでしまったカムパネラの自責の念ともとれる悲しい「思い」が込められている。たくさんの美しいリンドウの花の描写から悲しく「もの思い」にふけるカムパネラの内面描写への移行は唐突な感じがする。なぜ美しい風景描写のすぐ後に悲しい内面描写を持ってきたのだろうか。多分、この疑問に対する答えは同じ場面に登場するリンドウに隠されているような気がする。以下、植物学的に見た場合のリンドウの特徴および文学的にリンドウがどのように扱われてきたか調べ、これを基になぜ賢治が自然描写のすぐ後に内面描写をもってきたかを明らかにしてみたい。特に、リンドウを登場させている文学作品では賢治が読んだと思われるものの中から代表作2点を取り上げた。

## 1. 植物学的に見た場合のリンドウ

リンドウ(リンドウ科リンドウ属;*Gentiana scabra* var. *buergeri*)は、低山や亜高山の日当たりのよい草地に生える多年草で、茎は20~80cmばかり、葉は狭く尖り無柄で茎を抱いて対生する(葉は上部から見ると十字形)。花は晩秋ごろ、茎頂に集合して咲き、また梢葉腋にも咲く。花冠は青紫色で大きな筒をなし(合弁花)、口は五裂して副片がある。リンドウと言う名は、漢名である龍胆(新字体では竜胆)の唐音の音転(リウタム→リウタウ→リンダウ→リンドウ)に由来し、龍胆は、葉が龍葵(ナス科イヌホオズキ)のようで味が胆のように苦いからと説明されている(牧野, 1981)。群生することはなく(あるいは稀)、三々五々とかたまって生え、ときには枯れ草の中にぽつんと咲く姿も見かける(永田, 2006; 近田・清水, 2013)。また、ススキなどのイネ科植物に寄り掛かるように咲いていることが多い(木原, 2010)。著者も神奈川県箱根の仙石原でススキ原や自動車道淵の芝草に1本ずつ咲くリンドウを見たことがある。晩秋で他の花が少ないこと、群生しないこと、およびススキ原のイメージも重なって寂しさや物悲しさを感じることもある。我が国の代表的な植物学者である牧野(1981)も、リンドウを見るとかなり心が動かされたようで、著書の中で「花は形が大きく且つはなはだ風情有あり、こと

にもろもろの花のなくなった晩秋に咲くので、このうえもなく懐かしく感じ、これを愛する気が油然と湧き出るのを禁じ得ない」と感想を述べている。

## 2. 文学に登場するリンドウ

次に、文人たちが自らの作品の中でリンドウをどのように扱ってきたかを古くは紫式部の『源氏物語』(平安時代中期)を、また新しくは賢治と同世代の伊藤左千夫の『野菊の墓』を基に見てみたい。『源氏物語』では、第三十九帖(巻名「夕霧」)の光源氏の息子(夕霧大将)を主人公にした話の中に出てくる(光源氏50歳、夕霧大将29歳の八月中旬から冬にかけての話)。夕霧大将は親しい友(柏木衛門督で内大臣の長男)の未亡人である落葉の宮(女二の宮)に「思い」を寄せていた。しかし、物静かで奥ゆかしい落葉の宮は妻子のある夕霧大将に対して女房(貴族社会で身分の高い人に仕える女性)の取次を介してしか言葉を交わそうとしない。落葉の宮は夫の死後に病氣療養中の母(一条御息所)がいる山深い小野の山荘(京都市八瀬・大原あたり)に移っていたが、夕霧大将は自らの「思い」を伝えるため落葉の宮の母の病氣見舞いを口実にして霧深い八月中旬ごろから山荘を訪れる。落葉の宮の母が死んだあとに話は以下のように展開する。

滝の声は、いとどもの思ふ人を驚かし顔に耳かしがましようどろき響く。草むらの虫のみぞよりどころなげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より、龍胆(りんだう)の、われ独りのみ心長うはひ出でて露けく見ゆるなど、みな例のころの事なれど、をりから所がらにや、いとたへがたきほどの、もの悲しさなり。

例の妻戸のもとに立ち寄りたまひて、やがてながめ出だして立ちたまへり。なつかしきほどの直衣(なおし)に、色濃(こまや)かなる御衣(ぞ)の擣目(うちめ)、いとけうらに透きて、影弱りたる夕日の、さすがに何心もなうさし来たるに、まばゆげにわざとなく扇をさし隠したまへる手つき、「女こそかうはあらまほしけれ。それだにえあらぬを」と見たてまつる。

もの思ひの慰めにしつべく、笑ましき顔のほひにて、少将の君をとり分きて召し寄す。簀子(すのこ)のほどもなけれど、奥に人や添ひみたらむとうしろめたくて、えこまやかにも語らひたまはず。「なほ近くてを。な放ちたまひそ。かく山深く分け入る心ざしは、隔て残るべくやは。霧もいと深しや」

(『源氏物語』「夕霧」紫式部)

リンドウ(龍胆)が登場してくる引用文の前半部に関しての現代語訳(阿部ら, 1974)は、「滝の音は、

もの思う人を我に返らせようとするかのようにひとしおやかましく音を立てている。草むらの虫だけが頼りなさそうに鳴き声も弱まって、枯れ草の下から龍胆がひとり命の長さを見せてのびのびと這い出して霧に濡れている風情など、みな例のこの時節の趣であるが、折も折、所も所であるせいであろうか、ことに堪えがたいほどのもの悲しい気分なのである。」である。さらに、阿部らの校注には「草むらの虫」に対して「頼るべき人がなくなった落葉の宮を、草が枯れて隠れ場所がない虫の姿で象徴する」とある。一方、国文学者の渋谷（2013）は阿部ら（1974）の校注とは別に「龍胆」を落葉の宮、「草むらの虫」を宮を支える女房（貴族社会で身分の高い人に仕える女性）たちになぞらえられることも出来るとした。渋谷の補足説明を利用すれば、草が枯れて隠れどころがなくなり右往左往している虫たちの間で凜として咲き誇っているリンドウの姿を、頼りどころを失った主人（落葉の宮）に仕えることで不安になっている女房たちと、亡き夫と母を「思い」悲しみに堪え辛抱強く背を伸ばしている落葉の宮の姿に重ねることができる。いずれにせよ自然描写に落葉の宮と宮に使える女房たちの心情（内面）の表白を重ねる技法は見事というしかないが、物語の語り手はそれが耐えがたいほどにももの悲しいと言っている。さらに、引用文の後半部では、夕霧大将の心情も表白される。夕霧大将は父である光源氏とは対照的に生真面目で不器用なので自分の「思い」を直接落葉の宮に伝えられない。夕霧大将は、霧で自分の姿が見えないと思ったのか山荘にある寢殿の両開きの戸（妻戸）の前で御簾（みす）の中で宮と対座している少少将の君（宮の従姉妹で女房の一人）に向かって「どうぞもつと近く。そうすげなくさいますな。こうして山の奥まで訪れてくるわたしの気持ちは他人行儀の扱いをしよよいものですか。霧もほんとに深いのですよ（阿部ら訳）」と自分の「思い」を吐露する。すなわち、龍胆（リンドウ）は亡き夫と母を「思い」悲しみに堪え辛抱強く背を伸ばしている落葉の宮の暗喩であり、同時に夕霧大将の寂しい恋慕の「思い」の対象の暗喩でもある。霧は生真面目で不器用な夕霧大将の「思い」を表出する小道具に使われている。

一方、『野菊の墓』（伊藤，1955）ではどうであろうか。『野菊の墓』は主人公の政夫が10年余り前の悲しい体験を回想することで始まる。内容は15歳の少年政夫と従姉で2歳年上の少女民子の初々しい恋物語であるが、二人の親密な関係は家人や村人に噂されることにより引き裂かれ、さらに民子の死という結末で終わる。野菊とリンドウ（竜胆）が登場する場面は以下の通り。

野菊がよろよろと咲いている。民さんこれ野菊かと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞え

ないのかさっさと先へゆく。僕は一寸脇（わき）へ物を置いて、野菊の花を一握り採った。民子は一町ほど先へ行ってから、気がついて振り返るや否や、あれッと叫んで駆け戻ってきた。「民さんはそんなに戻ってきないって僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしていたの。私びっくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれッたら、私ほんとうに野菊が好き」

「僕はもともとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好（この）もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思う位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがった。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の様だってどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ」

（中略）

民子は云いさしてまた話を詰らしたが、桐の葉に包んで置いた竜胆の花を手を採って、急に話を転じた。

「こんな美しい花、いつ採ってお出でなして。りんどうはほんとによい花ですね。わたしりんどうがこんなに美しいとは知らなかったわ。わたし急にりんどうが好きになった。おオエエ花……」

花好きな民子は例の癖で、色白の顔にその紫紺の花を押しつける。やがて何を思いだしてか、ひとりでにこにこ笑いだした。

「民さん、なんです、そんなにひとりで笑って」

「政夫さんはりんどうの様な人だ」

「どうして」

「さアどうしてということはないけど、政夫さんは何がなし竜胆の様な風だからさ」

民子は言い終って顔をかくして笑った。

（『野菊の墓』伊藤左千夫） 下線は著者

ここでは、政夫が「僕はもともとから野菊がだい好き」、「民さんは野菊のような人だ」と言っ民子に対する恋慕の「思い」を野菊を介して表白するのに対して、民子も「わたし急にりんどうが好きになった」、「政夫さんはりんどうの様な人だ」といって政夫に対する「思い」を政夫がやったのと同じように返している。政夫と民子は家人や村人の噂を気にして自分たちの思いを花を通して間接的にしか言えなくなってしまった。

『源氏物語』と『野菊の墓』に登場するリンドウに

共通するものは、それぞれの作品の主要登場人物の「思い」あるいはその「思い」の対象になっている人物の比喩として使われていることである。『源氏物語』の「龍胆」は夕霧大将が恋しく思う「落葉の宮」（暗喩）そして『野菊の墓』の「竜胆」は政夫が恋しく思う「民子」（直喩）である。このような植物を擬人化する手法および植物を介して「思い」を伝える手法は遠く『万葉集』に遡ることができる。7世紀後半から8世紀後半頃に編まれた和歌集である『万葉集』に、「道の辺（へ）の、尾花（をばな）が下の、思ひ草、今さらさらに、何をか思はむ（作者不詳）」という歌がある。この歌に出てくる「思い草」がどの植物に対応するかについて様々な説があるが、「リンドウ」も一つの候補に挙げられている。リンドウは木原（2010）が指摘するように、ススキ等のイネ科植物に寄り掛かるように咲いていることが多い。現代語訳は「道ばたの尾花（ススキ）の蔭の思い草のように今あらためて何を思い迷おうか。あなただけを思っていますよ」（小島ら、1973；下線は著者）である。「思い草」をリンドウとした鎌倉時代の歌人藤原定家はこの万葉歌を参考歌に「霜うづむ尾花が下の枯れまより色めづらしき花のむらさき」（『拾遺愚草員外』、花のむらさき＝リンドウ）と詠んだ。

ここまでくれば、『銀河鉄道の夜』の「りんどうの花」が出てくる引用文において、風景描写のすぐ後に内面描写をもってきた理由は自ずと明らかになるであろう。『銀河鉄道の夜』の「りんどう」は、カムパネルラが悲しく思う母への「思い」の暗喩であり、母への「思い」を友人のジョバンニに伝える手段として使われている。ジョバンニとカムパネルラの関係であるが、第一章の「午後の授業」でジョバンニは「学校を出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになっていた」と記載されているので、カムパネルラもまたジョバンニに自分の「思い」を伝えづらかったはずである。しかし、カ

ムパネルラの母への「思い」はとても強く、「湧（わ）くやうに、雨のやうに」脳裏をよぎってくる。そこで、賢治はカムパネルラの泣き出したぐらいの悲しい心情を、第七章の文章の冒頭で表現する前にそれとなく伝えるために第六章末尾で群生した「たくさん」の「りんどう」を見せたのだと思われる。多分、賢治は自然界（地上）では存在が稀な群生したリンドウを見せることによって、別の言い方をすれば魔法（ファンタジー）をかけることによって自責の念で頭が一杯になっているカムパネルラの母への「思い」を表現し、友人のジョバンニに伝えやすくしようとした。それゆえ、読者がもしも「群生したリンドウ」＝「カムパネルラの脳裏に湧（わ）くやうに、雨のやうによぎる母への思い」を意識的にあるいは無意識的にも重ねて読み取ることができたなら、次の章の「思い切ったといふように」表白される「カムパネルラの母への思い」をごく自然に受け入れることができると思う。

## 引用文献

- 阿部秋生・秋山 虔・今井源衛（校注・訳）. 1974. 源氏物語四. 小学館. 東京
- 近田文弘・清水建美. 2013.2.18.（調べた日付）. 野の植物 100 選.  
[http://research.kahaku.go.jp/botany/wild\\_p100/autumn/index.html](http://research.kahaku.go.jp/botany/wild_p100/autumn/index.html)
- 伊藤左千夫. 1955. 野菊の墓. 新潮文庫. 東京.
- 木原 浩. 2010. 山の花(新ヤマケイポケットガイド). 山と溪谷社. 東京.
- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広（校注・訳）. 1973. 萬葉集三. 小学館. 東京.
- 牧野富太郎. 1981. 植物知識. 講談社. 東京.
- 永田芳男. 2006. 秋の野草(山溪フィールドブックス). 山と溪谷社. 東京.
- 渋谷栄一. 2013.2.11.（調べた日付）. 源氏物語の世界.  
<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>